海外旅行のすすめ

英語英文学科3年　兼田　洋平

これから海外旅行に行かれるみなさんへ。これから僕の経験を通じた、教訓を提示したいと思う。初めての国に行かれる方には、特に読んでいただきたい。

今年の夏、実質大学生活で最後の夏休みということで、僕はロサンゼルスへ旅行に行ってきた。旅行といっても建前は父の仕事の手伝いということだったので、旅費のほとんどは父が負担してくれた。僕にとって初めてのアメリカだったのでとても楽しみだった。

アメリカに着いて2日目、父の仕事が早く終わったため、少々無理な行程ではあったが出かけることになった。僕たちは2時間ほどハリウッドを観光し、リトルトーキョーで父と一緒に昼ご飯を食べた。

「俺はホテルでゆっくりするけどお前はどうする？」

一休みをしていると父が聞いてきた。僕はもう少し観光をしてから帰ると伝え、ユニオン駅で父と別れて再びハリウッドへ向かった。

それからさらに2時間ほど観光を楽しみ、暗くなる前には帰ろうと思っていた僕はユニオン駅へと戻った。父はここから、「アムトラック」という鉄道でアナハイムまで帰ったが、この方法だと10ドルかかる。ガイドブックを見てみると地下鉄のアナハイム駅があることがわかり、1ドル25セントで帰れるようだったので、ディズニーリゾート周辺の地図には地下鉄の駅の場所は載っていなかったが、鉄道の駅と一緒だろうと思い、あまり深く考えずに地下鉄に乗り込んだ。なにしろ同じ〝アナハイム駅〟だったので、疑う余地がないように思えたのだ。

地下鉄でガイドブックを開いてみると、移動手段のページに地下鉄での帰り方がやはり載っていなかった。

それから1時間くらい地下鉄に揺られ、夕方5時30分、僕は、地下鉄のアナハイム駅で降りた。そして駅の前で現在地を把握しようとガイドブックを開いてみた。やっぱり地図に現在地と思われる場所がない。どうしたものかと思いながらも、とりあえず通りかかった人に聞いてみようと思い、〝アナハイムストリート〟という通りを歩き始めた。

旅行のテーマが『現地の人と会話を楽しむ』だった僕は、地図を見ずに出会った人と道を聞きながらホテルまで帰れたらいい経験になるな、などとのん気なことを考えながら15分ほど歩いていたわけなのだが、何かがおかしい。人っ子一人いないのだ。この通りには人は少ないのか？しかし、なにしろ地図に載ってない場所を歩いているために、今歩いている通りを離れたらさらに分からなくなるし、何より危ないと思い、そのままアナハイムストリートをまっすぐに歩き続けた。

それからさらに10分、駅から歩き始めて30分ほど経ち、少し不安が生まれてきた頃、1人のおじさんが家から出てきた。少しホッとした僕は迷わずおじさんに話しかけた。

「ディズニーリゾートはどっちですか？」

おじさんは、

「歩いて行くの？」

と言う。僕は、

「はい、歩きです。」

と答えた。するとおじさんは、
「歩くのか。とにかく方向はこっちだ。」
と僕が歩いてきた方を指差した。さすがにちょっとがっくりときたが、その言い方だったら少し遠そうだが歩いて帰れるのだろう。僕はおじさんにお礼を行って、教えてもらった方向に向かって再び歩き始めた。ところがこれが大きな間違いだった。
先ほど歩いてきた寂れた住宅街を戻って歩いていると、やっぱり人がいない。バス停を3か所以上通り過ぎたが、並んでいる人は1人もいなかった。日曜日の夕方だからだろうか？30分かけてアナハイム駅に戻って来る頃には、陽は西に傾きかけていた。
とにかく、アナハイムストリートをまっすぐ歩いて行けばホテルに戻れる。少々遠回りもしたがゴールが見えた今、いい運動ができたと割り切ることができた。
少し安心したらお腹がすいてきた。しかし寂れた住宅街なので飲食店がなかなかない。やっとの思いで見つけた店もなぜかすべてシャッターが下りている。飲み物だけでも買おうとするも、アメリカには自動販売機が少ないのか、まったく見当たらないためお腹をさすりながら歩き続けた。
歩き続けると空がオレンジ色に染まってきた。この時僕は、もうそろそろ着くだろうと思い、空の写真を撮って、キレイだなぁ、などと悠長に構えていた。この後自分に人生最大の恐怖が降りかかるとは知らずに。
それからしばらく歩いていると遥か前方にお城のような建物が見えてきた。
「シンデレラ城だ！！」
そう、やっとディズニーランドが見えてきたのだ。僕は今までの疲労も空腹感も忘れ、シンデレラ城を見つめ一心不乱に歩いた。距離はまだなかなかありそうだが、ゴールが目視できたので、幾分楽に歩を進めることができた。
しかし、ディズニーランドに近づいてきた頃、ひとつの疑問が生まれた。
「これだけディズニーランドに近づいているのに人が少なくないか？というよりさっきから人とすれ違ってなくないか？」
悪い予感は的中した。僕がシンデレラ城だと思って向っていた建物は凝った造りをしたホテルだったのだ。これにはもう苦笑いをするしかなかった。
「やられた…。」
ここがゴールだと思い歩き続けた僕には、これはさすがに堪えた。僕は肩を落とし、その場に立ち尽くしてしまった。
放心状態だった僕はしばらくそこに立ち尽くしていたと思うが、ここでこうしていても仕方がない。
「これだけ大きなホテルがあるならディズニーランドは近いはずだ。頑張って歩こう。」
と自らを奮い立たせ、再び前を見た。しかし次の瞬間、衝撃が走った。向かう先にはシンデレラ城どころか目印となるような大きな建物は一軒も建っていなかったのだ。その時、突然不安と焦燥感が襲ってきた。さらに、陽も暮れかなり外は暗くなってきたことが僕をいっそう焦らせた。冷静さを欠いた僕は、
「やばい…。どうしようどうしよう…。」
と、うわ言のように繰り返しながら歩き続けるしかなかった。途中、10歳くらいの男の子が前から歩いてきたが、すっかり怯えていた僕は必要以上に距離をとってすれ違った。男の子は怪訝そうな顔で僕を見ていた。
それから少し歩いたが、僕の心はすっかり折れてしまった。
「もう無理だ。タクシーで帰ろう。」
そして僕は道路の傍らに立ってタクシーが通りかかるのを待った。しかしタクシーに乗れたとしても、今度はお金が足りるか心配だった。

日本円は持っていたが両替をしていなかったので、父にもらった30ドルしか持ち合わせていなかったのだ。運賃は足りるだろうか？かなりの距離をあるいたからどうにかなるかもしれない。そんなことを考えながら待っていたが、一向にタクシーが来る気配がしない。街であれだけたくさん走っていた黄色い車体がまるで見られないのだ。不安が募る一方だ。それに加え、だんだんと苛立ちすら覚えてきた。

「あぁ、もう！なんで来ないんだよ！」

そんな様子で待っていると男性の話し声が聞こえてきた。辺りを見回すと2人の男性が向かいの道を歩いている。こんなに人通りの少ない道で男性の2人組に話しかけるのは少し怖かったが、1人でいるほうが不安だったので、僕は見失わないように、全速力で彼らに駆け寄っていった。冷静になって考えてみれば、こんなに人通りの少ない道を全速力で走っている僕のほうが2人にとってよっぽど怖かったんじゃないかと思う。

僕は恐る恐る1人に声をかけた。

「すみません、ディズニーリゾートまで行きたいんですけど、どうやって行ったらいいですか？」

1人のうちの背の高い、優しそうな顔をした男性は、

「歩いていくのかい？」

と僕に訊ねた。

「はい、遠いですか？」

僕が聞くと、もう1人の小柄な男性が笑った。

「ははは、歩いたら明日の朝になっちゃうよ。」

僕は驚いたが、大げさに言っているのだと思った。

「ここはどこなんですか？」

僕はそう訊ね、ガイドブックを開いてディズニーリゾート周辺の地図を見せた。すると、また驚くべき答えが返ってきた。

「ここには載ってないよ。」

そして大きな男性は僕からガイドブックを取り上げると、パラパラとページをめくり始めた。

「ここだ。」

と、僕が見せられたのはロングビーチという地域のページ。なんと僕はホテルから50キロ以上離れた場所にいたのだ。どうやら僕は50キロ以上の距離を歩いて帰ろうとしていたらしい。確かにアナハイムストリートをまっすぐに行けばディズニーリゾートにたどり着くことはできた。しかし日本でいえば、国道1号線沿いを茅ヶ崎から東京まで歩いていこうとしているようなものだったのである。これには呆然とするしかなかった。

「さっき会ったおじさんもディズニーリゾートまでは歩けないって言ってくれればよかったのに…。」

それから、大きな男性はこう教えてくれた。

「とにかく、歩くのはまず無理だ。バスでダウンタウンか空港まで行ったほうがいい。なんでもいいから来たバスの運転手にどこに行くか訊くんだ。帰り道を教えてくれるはずだ。」

「タクシーで帰ればいいじゃないか。」

小さな男性は面倒臭そうに口を挟んできたが、それを大きな男性がぴしゃり。

「タクシーはいいアイディアではないな。ここからではお金がかかりすぎる。そこにバス停があるから待っててみなさい。それじゃあ頑張ってね。」

大きな男性はとても親切にそう教えてくれた。僕はお礼を言って歩き始めたが、自分が泣きそうになっているのを感じた。

しかし、あれだけ親切に教えてもらっても、実際には何ひとつ解決していなかった。何も解決していないどころか、むしろ現状を知ってさらに悪い状況に追いやられた、というほうが正しい表現かもしれない。父の忠告を思い出したからだ。

「夜に人があまり使わないような場所で公共機関は使うな。バスでストリートギャングに身ぐるみを剥がされたという例もある。」
僕はまさに、夜に人があまり使わないような場所で公共機関を使おうとしていた。危うくストリートギャングに身ぐるみを剥がされるところだった。
歩くのは無理、バスは危ない、タクシーは高すぎるし本数が少ない。八方塞がりもいいところだ。僕はいよいよ「行方不明の邦人旅行客」になろうとしていた。
とりあえずこれからどうするか考えようしていたのと、じっとしていられなかったのとで、僕は再び歩き出した。少しでもホテルに近づいているという安心感を得たかったのかもしれない。とりあえずの行動だったが、これが吉と出た。前方にコンビニのようなお店が見えてきた。しかも灯りがついている。　僕は半ば駆け足でそのコンビニに入っていった。
中に入ると、韓国人らしき店員が接客中だった。僕は彼の接客が終わるのと、すぐに助けを求めた。
「すいません。ここからアナハイムまで帰りたいんですけど、どうしたらいいですか？」
店員はすこし悩んだ顔を見せた後、こう答えた。
「タクシーを呼んであげようか？」
もう帰れるならどんな方法でもいいと思っていた。
「お願いします！でも30ドルしか持ってないんです。」
僕はそう言うと、思いがけない返事が返ってきた。
「問題ないよ。僕の友達のタクシードライバーを呼んであげるから。そこに座って待ってて。」
と、スピードくじを削るのに使う席に案内された。
このコンビニはなかなか繁盛しているらしい。あれだけ静かな住宅街なのに客が絶え間なくやってくる。僕が通りを歩いているときは、みんなどこにいたのだろうか。
しばらく待っていると接客が落ち着いたのか、店員が僕の所にやってきた。彼はジュースをごちそうしてくれた。そして彼は、僕のおどおどした様子を心配したようで、息子の写真を見せてくれた。彼の息子はジョージア大学を首席で卒業して、今はワシントンで弁護士をしているらしい。
「自慢の息子なんだ。」
と何度も聞かせてくれた。そうやって、彼が僕を安心させてくれようとするのですっかり僕は落ち着いた。安心したのと、こんなに温かく接してくれて嬉しかったのとで僕はまた泣きそうになった。
客が入ってきたので、
「あと10分くらい待ってね。」
と言い残し、店員はレジへ戻って行った。
しばらく待つと、店の外に僕が恋い焦がれた黄色い車体が止まった。タクシーの中で、東南アジア出身と思われる運転手が真っ白な歯を見せて笑っている。
コンビニの店員がこちらへやってきて、タクシーまで案内してくれた。
「この子をアナハイムのホテルまで送ってほしいんだ。お金が十分ないかもしれないがいいかい？」
店員がそう言うと、運転手がまたニコッと笑った。
「もちろんだよ。」
僕は店員と握手を交わし、タクシーに乗り込んだ。コンビニの住所や連絡先がわかったら手紙でも書いて彼にはお礼をしたいと思う。
タクシーに乗ると、運転手に尋ねられた。
「お金がないの？いくら持っているの？」
僕は30ドルしか持っていないことを伝えると、彼はうんうん、とうなずいた。

「ほんとは60ドル位かかるけど問題ないよ。」
なんて優しい人なんだろうと思った。僕が出会ったすべての人がみんな優しくて親切だった。僕もこの人たちのようになりたいと思った。
運転手の名前はモリーンというらしい。僕が自分の名前を教えると楽しそうに、
「ヨウヘイ！ヨウヘイ！」
と何度も何度も繰り返した。
モリーンはひたすら気さくな態度で話しかけてきた。僕が10秒黙ろうものなら、
「ヨウヘイ、話そう。話さないと寂しいよ。」
と催促をしてくるほどだった。
走り始めてしばらくすると、彼はいろいろ詮索してくるようになった。
「ヨウヘイは誰と来ているの？」
「まだ何日かいるの？」
「ホテルに今誰かいる？」
何か変だなと思ったが、僕はすべて正直に答えた。するとモリーンが一番しかったであろう質問をしてきた。
「ホテルにはお金はあるよね？」
お金を請求されれば、もちろんホテルからお金を取ってきてでも払うつもりだったし、彼にも生活があるのももちろんわかっていた。しかしあの店員に嘘をついたことだけは、僕は許せなかった。それからも彼は話そうと言ってきたが、僕はこれ以上彼と話したくなかったので何を言われても黙っていた。それでも話しかけてくるので僕はうんざりしていた。
それから30分くらいたったころだろうか。見たことがある景色が見えてきた。ここまで来ればホテルがもう目と鼻の先だということがわかる。今度こそやっと肩の力が抜けた。
ホテルに到着すると、僕は（一応）お礼を言ってタクシーから降りた。そして急いで部屋に戻って、父に事情を話しお金を借りて再びロビーまで降りた。そして、タクシーがある場所まで駆けていき、できれば顔も見たくなかったが、モリーンに残りのお金とチップを渡した。モリーンは握手を求めてきたので、不本意ではあったが、握手を交わした。そして今度こそ安心して、しかしぐったりして部屋に戻っていった。帰った頃には夜の10時になっていたが、その日は部屋に着くなり疲れ果てて寝てしまった。夢に白い歯を出してニコッと笑っているモリーンが出てきた。
人との出会いを大切にする。これは今回の旅でとても素晴らしく、意味のあるものだと感じた。アナハイムストリートで出会った男性の2人組にもコンビニで出会った韓国人の店員にも心の底から感謝しているし、出会えてよかったと思えた。
しかしそれ以上に得た教訓は、「始めて行くところではガイドブックの言う通りにしたほうが良い」ということだ。これは身をもって経験したのでみなさんには強く訴えたい。これを読んでくださったみなさんは初めて行くところでは必ずガイドブックを見て、それに則した行動なり移動手段をとってほしい。素敵な出会いや感動する出来事はあるかもしれないが、それ以上の危険と恐怖が潜んでいるのだから。
これを教訓に、ガイドブックと仲良くして、素晴らしい旅をしていただけたら幸いである。